

『大護明陀羅尼』 *Mahāmantrānusāriṇī* 別本について

園 田 沙 弥 佳

1. 五護陀羅尼と『大護明陀羅尼』

『大護明陀羅尼』 *Mahāmantrānusāriṇī* は、五護陀羅尼 *Pañcarakṣā* に含まれる初期密教經典の一つである。インド密教における五護陀羅尼は『大随求陀羅尼』 *Mahāpratisarā*, 『守護大千国土經』 *Mahāsāhasrapramardanī*, 『孔雀王呪經』 *Mahāmāyūrī*, 『大寒林陀羅尼』 *Mahāśūtavatī*, そして『大護明陀羅尼』といった特定の5種の陀羅尼經典の總称、および、それらの經典が神格化された女神のグループを示す。五護陀羅尼の各經典は単独で成立し、主にネパール、チベット、中国、日本等に広まった¹⁾。上記のうち『大寒林陀羅尼』と『大護明陀羅尼』は、サンスクリット・テキスト、漢訳、チベット語訳の間で概ね内容が共通している經典（以下、サンスクリット系統と称す）と、チベット語訳にのみ存在する經典（以下、チベット語訳系統と称す）の2種存在することが Skilling 氏によって言及されている²⁾。五護陀羅尼に属する經典は合計7種類確認されており、5種の經典の組み合わせは2つのパターンが存在している。

近年の五護陀羅尼經典の先行研究には、Hidas 2017があげられる。Hidas 氏はサンスクリット系統『大寒林陀羅尼』の詳細な校訂や英訳、他經典との比較考察を行った。なお、そこでは『大寒林陀羅尼』成立の際に影響を受けたといわれる『檀特羅麻油述經』への言及はない。大塚氏は2010年、両經典の密接な関連性やサンスクリット系統の『大寒林陀羅尼』の形成、展開等について重要な指摘をしている³⁾。

従来、チベット語訳系統の五護陀羅尼に関しては比較的に取り上げられることが少なく⁴⁾、チベット語訳『大護明陀羅尼』の具体的な内容はこれまで明らかではなかった。『大護明陀羅尼』のサンスクリット系統とチベット語訳系統は両者とも同名の經典と見なされている一方、その内容構成は大きく異なっている。本論文ではチベット語訳『大護明陀羅尼』の構成および特色を明らかにする。

2. 2種の『大護明陀羅尼』

先に述べた通り、『大護明陀羅尼』(略号 MN) には2種類が存在する。第一に、サンスクリット・テキストと漢訳が存在する MN (略号 MN-A 本)、第二に、チベット語訳のみ存在するといわれている MN (略号 MN-B 本) である。

奥山1998: 67-86において、MN-A 本の内容構成は根本説一切有部律『薬事』や、同経典から抽出された『ヴァイシャーリーブラヴェーシャ』と同様であることが論証され、根本説一切有部律所伝の経典が初期密教経典である MN-A 本にはほぼ合致していることが指摘された。八尾氏の『薬事』翻訳研究においても、MN-A 本と『薬事』の関係性が指摘されている⁵⁾。他方で、MN-A 本は五護陀羅尼の中でも最後に成立した『守護大千国土経』にも通じている。『守護大千国土経』では世尊が実際にヴァイシャーリーのリッチャヴィ族のもとに赴き、世尊を見たリッチャヴィ族が安堵する場面がある。MN-A 本に世尊がリッチャヴィ族のもとを訪れる場面はないものの、『守護大千国土経』の物語の骨子はヴァイシャーリーの疫病退散であり、MN-A 本の目的と共通しているところがある⁶⁾。

以上の MN-A 本と B 本は9世紀前半にチベットで編集されたデンカルマ目録に収録されている⁷⁾。また、同時期に編纂されたパンタンマ目録においても、「五大陀羅尼」gzungs chen po lnga のもとで MN が収録されていることが確認できる⁸⁾。以下、MN-B 本の内容構成とその特色について述べる。

3. MN-B 本の内容構成

ここでは、チベット語訳 MN-B 本 (Ota. No. 181, Toh. No. 563) の概要を述べる。

[0] 帰敬偈

[1] 世尊とブラフマーの問答 三宝、諸仏、法や声聞などへの帰敬偈の後、世尊がシュラーヴァステイー(舎衛城)のジェータヴァナ(給孤獨園)に住していたことが述べられる。その時、諸々の眷属を伴ったサハー世界の王ブラフマーや、インドラの王であるシャクラ、四天王、二十八ヤクシャの首長や、ヤクシャ女とその息子が世尊のもとを訪れ、世尊に礼拝した。

その中で、ブラフマーは世尊に礼拝した後、一切の三千大千世界を守護し、完全に防護し、完全に保護する呪文をお説き下さい、と世尊に懇願した。世尊は何も語らず、ブラフマーはそれを理解し、たちどころに消え去った、と述べられる。

[2] 世尊の大護明陀羅尼 それから世尊は昨晩起こった出来事を比丘たちに説

明した後、アーナンダに対し、[これから説く] 明呪の女王である大護明陀羅尼を保持し、記憶し、説くように、と述べた。この陀羅尼は過去、未来、現在において説かれ、東と主な方位とその間には結界が生じる⁹⁾、という。また、この陀羅尼はブラフマー、インドラ、四天王、二十八大yakshaの長、yaksha女も説くもので、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は誰であっても、この大護明陀羅尼によって守護され、東西南北とその間には1クローシャに至るまで結界で守られる、という。

さらに世尊は続けて、四天王の道や道ではないところにいる四種の者の名前を理解し、また、部族を理解すれば、王難、盗難、火難、水難、人の恐れ、人ではない者の恐れは生じない、と説く。そのほか、「金剛手の兄ラクミュル¹⁰⁾」と呼ばれる街に住する者や、十四大ラクシャサ女、八ラクシャサ女、七ラクシャサ女、偉大な黒いラクシャサ女なども同様に、彼らの名前や部族を理解すれば守護される、と述べた。

この大護明陀羅尼の守護によって、人、人でない者、yaksha、ラクシャサ、アスラ、ガンダルヴァ、ナーガ、ガルダ、グフヤカ、ガキ、ピシャーチャ、ヴェーターラ、放呪鬼、仇をなす者¹¹⁾、プータナ、カタ・プータナ、ウンマーダや忘念鬼、欠点を見る者や、傷つける者たちは、完全にいなくなり、居場所がなくなるといふ¹²⁾。また、彼らの名前を知ること、以上の「障りをなす」者を退散させ、また、毒がなくなると述べられる。

[3] 大護明陀羅尼の機能 [大護明陀羅尼は、] 傷つけようとする者、邪悪な心を持つ者、不利益を考える者、マラーヤ、毘沙門天らのすべてを夢中にさせ、麻痺や、怠惰や、手、足、心、舌を保護し、どこにあっても自由であるという。また、王、大臣、盗賊、火、水、敵、敵の群れ、道から外れた者、眠る者、酩酊する者、無関心の者等から守護すると説かれる。また、足を持たない者、二足、四足、多足の者、形を持たない者、知覚を持つ者、持たない者であっても守護されるという。この(大護明陀羅尼の)呪文は、最上の不運から解き放たれるものと呼ばれており、王都、都市、村、市、街、家、国であれ、病人を守護するといふ。輝きを奪う者一切は退散するべきであり、この名前を知ること四百四病が完全に鎮まれ、と述べられる。

[4] アーナンダ、ブラフマーたちの歓喜 以上、世尊によって言われたことにより、尊者アーナンダや、サハー世界の王ブラフマー、神や人、アスラやガンダルヴァと共にいた世間の存在は即座に歓喜したという。

[5] 奥付 最後に、シャイレンドラボーディ Śilendrabodhi、ジュニャーナ

シッディ *Jñānasiddhi*, シャーキャブラバ *Śākyaprabha*, イェーシェーデー *Ye shes sde* が翻訳したと記される。以上が MN-B 本の概略である。

4. MN-A 本との比較

前述の MN-B 本はジェータヴァナにおける世尊とブラフマーの対話と、様々なラクシャサ女等の鬼神の姿、そして身体の保護や、諸々の災難や病を退けるための大護明陀羅尼をアーナンダに説くという内容で構成されている。次に、MN-A 本の内容構成について簡単に概要を述べる。

初めに、大護明陀羅尼と諸仏への帰敬偈が説かれる。世尊はラージャグリハ(王舎城)の近く、カランドカニヴァーパ(竹林精舎)の森に住していた。そこで世尊は、ヴァイシャーリーに行くよう、アーナンダに告げた。世尊はヴリッジを通してヴァイシャーリーに到着し、アムラパーリーというマンゴー林に滞在する。世尊はアーナンダに、都城ヴァイシャーリーに行って門の敷居に足を置き、次に述べる大護明陀羅尼を唱えなさいと述べた。大護明陀羅尼によって疫病は鎮まり、悪心を持つ者は散り、守護を望むことを欲するものは留まれ、と述べ、陀羅尼呪が説かれる。さらに、形のある者や形のない者、知覚のある者、知覚のない者、知覚が全くない者、足のない者、二足の者、四足の者、多足の者であっても仏によって安寧となり、無病になるための祈願が17の偈頌によって説かれる。以上が本經典の前半部である。後半部では、世尊から教えられた方法で実際にアーナンダが実践する様子が説かれる。最後に、世尊から以上の大護明陀羅尼を聞いた比丘や菩薩、神、人、アスラ、ガンダルヴァは即座に歓喜したと述べられ、終結する。以上、MN-A 本の内容構成である。

前述した MN-A 本と B 本の共通点としては、世尊とアーナンダが主要な人物として登場することがあげられる。また、両者とも陀羅尼の力によって、疫病や諸々の障りからの守護を主な目的としていることが共通している。その他、MN-B 本では陀羅尼による守護の対象として、足を持たない者、二足、四足、多足の者、形を持たない者、知覚を持つ者、持たない者を挙げ、MN-A 本でも、形のある者やない者、知覚のある者やない者、足のない者、二足、四足、多足の者と、同様の表現が見られる。なお、この表現は初期大乘經典のひとつ『法華経』「随喜功德品第十八」や、因縁譚を説く『出曜経』等にも見られる¹³⁾。

以上が MN-A, B 本の主な共通点であるが、双方の内容構成全体を比べると隔たりが大きい。例えば登場人物について、MN-A 本と B 本は共に世尊とアーナン

ダが登場していることは先に共通点として述べたが、さらに MN-B 本ではブラフマーやアーナンダ以外の比丘の存在も記述されており、A 本とは相違が生じている。また、そもそも MN が説かれる場所も異なっている。A 本はヴァイシャーリー、B 本ではシュラーヴァスティーのジェータヴァナである。經典の分量も MN-A 本と比べると B 本の方が多いが、両者の内容から見て、増補、あるいは省略された經典という関係には当たらないと思われる。

MN-B 本は MN-A 本よりも、むしろ『孔雀王呪経』との関連性が見受けられる¹⁴⁾。まず、両者の經典とも祇園精舎で説かれている¹⁵⁾。また、MN-B 本で様々なラクシャサ女等の鬼神が説かれているが、『孔雀王呪経』でも十二大ピシャーチャ女、八大ピシャーチャ女、七大ピシャーチャ女、五大ラクシャサ女、八大ラクシャサ女の名前と功德が説かれる。MN-B 本と『孔雀王呪経』の間でそれぞれの鬼神の名に相違はあるものの、両者ともラクシャサ女等の名を学び知ることによって守護されるという機能は同じである。

先に述べた通り、MN と見なされている MN-A, B 本を比較すると、經典の説かれる場所、登場人物等、内容構成自体に相違が多くある。おそらくインドでは MN-A, B 本の元となった經典が別個に存在し、その後展開して五護陀羅尼（チベットでは五大陀羅尼）の MN として採用されたと推察される。同様のことは以前発表した『大寒林陀羅尼』にも生じており¹⁶⁾、サンスクリット系統とチベット語訳系統において五護陀羅尼の内容に違いが生じた背景を今後検討していきたい。

1) 浅井 1988, 104 によると、日本では『大随求陀羅尼』や『孔雀王呪経』が空海より請来され、古くから真言宗内で尊ばれているという。作例としては清水寺の大随求菩薩坐像、高野山の孔雀明王像等が知られている。清水寺随求堂では今年の春と秋に、本尊の大随求菩薩坐像（1728 年）が開帳された。随求堂内での公開（居開帳）は 222 年ぶりといわれ、筆者は 3 月 15 日に拝観の機会を得ることが出来た。

2) Skilling 1992, 138 および 180-182 を参照。

3) 大塚 2010, 147-169 によると、4 世紀前半頃に成立した『檀特羅麻油述経』の内容が『大寒林陀羅尼』A 本に展開し、その後五護陀羅尼に組み込まれたという。さらに『大寒林陀羅尼』に明呪を増補して『寶帶陀羅尼經』が成立、さらに儀軌を付加させた『聖莊嚴陀羅尼經』が発展、形成されたこと等について論証されており、4 世紀前半頃のインド密教の様相等について詳しく言及されている。

4) 筆者は園田 2016 で 2 種の『大寒林陀羅尼』を比較検討し、両者の登場人物や内容構成が大きく異なっていることを提示した。

5) 八尾 2013, 123 を参照。

6) 五護陀羅尼の中で重複した主題が扱われている理由については定かではない。

7) 奥山 1998, 70, 芳村 1974, 148 を参照。

- 8) 川越 2005, 西藏博物館 2003 を参照。
- 9) ラサ མཚན་གཙང་པོ་ mtshams gcad, デルゲ མཚན་གཙང་པོ་ mtshams bcad.
- 10) $\text{ལག་ན་རྩ་ལྟེ་ལྟ་བུ་ལག་ལྟ་བུ་}$ lag na rdo rje'i phu bo lag myur.
- 11) གཤེད་བྱེད་ gshed byed.
- 12) ここであげられる諸々の鬼神は、チベット語訳『大寒林陀羅尼』 bSil ba'i tshal chen po'i mdo (Ota. No. 180, Toh. No. 562) の記述と共通している。
- 13) 「若有形無形。有想無想。非有想非無想。無足二足四足多足。」(『妙法蓮華經』「隨喜功德品第十八」大正9, No. 262, p. 46 下), 「衆生世者一足二足四足乃至衆多足。有色無色有想無想亦非想非不想。」(『出曜經』大正4, No. 212, p. 639 中)
- 14) Skilling 1992 によると, MN-A, B 本は Candra-sūtra/Canda-paritta, Udānavarga 『出曜經』, Prātimokṣa-sūtra, satyavāk, agraprajñapti に関連しているというが, その具体例はない。
- 15) これは五護陀羅尼經典の中でも MN-B 本と『孔雀王呪經』のみ共通する。
- 16) 園田 2016 参照。

〈略号表〉

MN *Mahāmantrānusāriṇī*.

MN-A 本 サンسكريット校訂本: See Skilling 1994.

漢訳:『大護明大陀羅尼經』(大正20, No. 1048) 宋法天訳 Ad. 984.

MN-B 本 チベット語訳: Gsang sngags chen po rjes su 'dzin pa'i mdo. (Ota. No. 181, Toh. No. 563)

〈参考文献〉

- 浅井覚超 1988 「『大随求陀羅尼經』梵藏漢対照研究密教文化」『密教文化』162: 91–104.
- 大塚伸夫 2010 「『檀特羅麻油述經』に見る初期密教の特徴」『高野山大学密教文化研究所紀要』23: 147–169.
- 奥山直司 1998 「初期密教經典の成立に関する一考察」『インド密教の形成と展開: 松長有慶古稀記念論集』法蔵館, 67–86.
- 川越英真 2005 『dKar chag' Phang thang ma』東北インド・チベット研究会.
- 園田沙弥佳 2016 「『大寒林陀羅尼』 *Mahāśītavatī* 異本について」『印度学仏教学研究』65(1): 150–154.
- 塚本啓祥, 松長有慶, 磯田熙文編 1989 『梵語仏典の研究 IV 密教經典編』平楽寺書店.
- 八尾史 2013 『根本説一切有部律彙事』連合出版, 123–128.
- 西藏博物館 2003 『dKar chag' Phang thang ma』民族出版社.
- 芳村修基 1974 『インド大乘仏教思想研究——カマラシーラの思想——』百華苑.
- Skilling, Peter. 1992. "The Rakṣā Literature of the Śrāvakayāna." *Journal of the Pāli Text Society* 16: 109–182.
- . 1994. *Mahasūtras: great discourses of the Buddha*. Vol. 1, 2. Oxford: Pāli Text Society, 608–622.
- Hidas, Gergely. 2017. "Mahā-Daṇḍadhāraṇī-Śītavatī: A Buddhist Apotropaic Scripture." In *Indic Manuscript Cultures through the Ages: Material, Textual, and Historical Investigations*, ed. Vincenzo Vergiani et al., 449–486. Berlin: De Gruyter.

(平成30年度東洋大学井上円了記念研究助成による研究成果の一部)

〈キーワード〉 初期密教經典, 五護陀羅尼文獻, *Pañcarakṣā*, 『大護明陀羅尼』, 『マハーマントラヌリーリニー』

(東洋大学東洋学研究所奨励研究員, 博士)